
真・恋姫†転生 ～太史慈伝～

(・ω・パン)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†転生 ～太史慈伝～

【Nコード】

N9713Y

【作者名】

(・ω・パン)

【あらすじ】

前作？のリメイク版？再構成版？です。

仕事で忙しく放置してたら編集中心データ消えてたお！だから新しく作っただお！

グッバイ妄想猛ちゃん。グッモーニン厨二猛ちゃん

終わりと始まり（前書き）

今度は頑張るお！

でもPC修理にだすのでまた遅れるかもだお！

終わりと始まり

「・・・！・・・っ！」

誰かいるのか？

俺は暗闇の中誰かの発する声に耳を傾けた

てかなんで暗いんだ？そりゃお前さん。目を閉じてるからだよ

なら開けば解決だね

「・・・」

ん？あれ？開かない。んだよ。俺まだ寝てんのか？早く起きろよ。
もうすぐバイトじゃねえか。多分。

てか今何時よ？

目が開けない現状に若干パニックになる俺。

意外とビビるよね。朝起きて目が開けないと。まああん時は目や二
だっただけさ

こう・・・なんと言うか・・・原田氏的に言つと意識はハッキリし
てんだけど肉体的にスルー的な？みたいなの？

・・・いや少し落ち着こう。若干ではなくかなりパニックになつて
るな俺。前川氏的に

「猛！大丈夫なの？！ねえしっかりして！」

落ち着いた結果がこれだよ！

何、いきなりすっかりしろって言われても俺もすっかりしてやりた
いよ、母さん。まあ母さんかどうか知らんが女性の方よ。できれば
詳細をキボンヌ

ああ俺目すら動かせませんからできれば俺の意思を読み取ってくれ

届け！俺の電波あああ！！

「ああ、どうしましょう・・・」

女性の声が弱弱しくなっていくのが解る

え？何？俺そんなにやばい状況なの？

やっぱいいや。何か怖いし、電波届きそうに無いし

「グスつ・・・」

おいおい、泣くなよ。何があつたかしらんが泣いてちゃ何を始まら

んだろう

「・・・泣いてる暇なんてないだろう？」

「・・・?! 猛!!」

あ。なんかしらんが声は出せた。いや”出た”か。完全に無意識だったわ

「そうね。しっかりしないといけないわよね。」

そうそう。未だ現状を理解できてない俺は何もできないし動けないしね。物理的に

「すぐに止血するわ!」

「・・・ああ」

・・・え？

あ、俺出血してんの？

・・・あー道理で何か頭らへんが生暖かいわけだ。ちよつと膝枕を期待してた俺ちよつとこっちこい

あ・・・やべ。ふざけてる暇なんかなさそう

「猛っ！！だめっ！意識をしっかり持って！寝ちゃだめよっ！！」

いやすまん。俺にはどうにもできそうに無いわ。動けんし眠いしね。

「いやあ！嫌よ！ねえ！」

どこの女性の方よ。ごめんよ。俺・・・も・・・う・・・

——愛していたよ——

俺は何となく言わなくてはならないような気がしたので俺の人生、

ベスト3に入るのではないかという縁も所縁も糞も無い言葉を言い
残し意識を手放して逝った

—— 第一話【終わりと始まり】 ——

「はっ!?!」

暗闇の中を漂っていたら行き成り意識が覚醒した

「……ん」

よし。今度は目も開けられた。てかすごい眩しい

俺は上半身だけ起こし目をパチパチと開け閉めをし目を明るさに慣れさせる

「……ここは、どこだよ？」

光に慣れた目を行使するとなんとも言えない”真っ白な空間”に俺は居た

どうでもいいが、なんか自分の身体を使う（てのも変な表現だが）のがひどく懐かしい気分になった

……まああんな意味不なできごとが起これば気分も体調もちつとは支障くるわな。多分

「えーっと……まずは」

何故かギチギチに固まった身体を無理やりお越し準備体操をする。身体を捻らせるたびに骨がポキポキとなるのはちよつと気持ちが良い。

ちなみに指を引っ張ったりしたり捻ったりすると「ポキっ」っとな

るあの音だが、あれは関節の中に機械で言う潤滑油のような部分に
気泡がたまり、それが破裂した時に鳴る音だったりする

「お1つ21、34 - っと」

ふう。まあこんなもんかね、と呟き閉めに深呼吸を開始する

「すうー・・・はああ・・・」

さて、どうしたもんか。もうすることも無いし何したらいいのかわ
からん。てか今更ながら俺、よくこんなよくわからん場所で準備体
操なんてできたな

「・・・」

いやマジ、誰かこいよ。何で俺をこげなところに放置するばい。放
置にされて興奮する性癖なんぞ持ち合わせておらんばい！ビクンビ
クン・・・！

いやまてよ？コレ俺の夢落ちとかないよな？まあ確かに夢落ちのほ
うが俺的に助かるし説明も付く。だけど結構意識ハッキリしてるよ
ーこれ？

まさか俺の妄想とか邪気眼とかそんな類？誰かツツコンでえええ！

誰か「中二病乙」でも「黙れカス」でもなんでもいいから誰かツツ
コミに来て！一人は寂しいのよお！

「そんなんじゃないですよ」

「え・・・」

声ができる方向に反射的に顔を向けた

「と言うか結構やばな人なんですね。アナ様は」

俺の後ろから声が聞こえたときにも思った

人は音や形で感動ができるのだと。この小さな女の子はすべてが芸術的な姿形をしていた。そうまるで・・・

——天に舞う天使のように——

と、芸術のげの字もわからん俺が評価するのもあれなんだが簡単に
言えばこの幼女は相当可愛いの種類に入るのではないだろうか

透き通った瞳、絹のような肌。柔らかな金色の髪。そして純白のワンピース。これに金の輪でも頭の上に浮いてればビーナスも絶叫して生まれたことに後悔するだろう、そうでありたい。何あのビーナス。綺麗とも思えんよ。ピカソ？ガキの落書きかなんかか？まだ俺のみいーちゃん（猫♂）のほうがきれいに描けるわ

そんな俺は小中高全て美術1なのだ。図工は得意だがね

「てかさつき俺の頭の中覗いただろ。見ちゃだめだぞ。すんげー恥ずかしいから」

ぶっちゃけそうでもないが

「覗くって・・・さつきからボソボソと小声で言っていましたよ？」

Oh・・・なんてコッタイ。俺の嬉し恥ずかし妄想ワールドを知らず知らず呟いていたとは。

「というかかなり冷静なんですね」

一人軽く悩んでいたところに少女が話しかけてきた

「うん、まあさつきからずっと意味不な状況だったからね。焦るビビる通り越して冷静なんじゃないかと俺は思う」

「さいですか」

さいです

「ああ俺、^{ハラダケル}原田猛。歳は一八で趣味はネット（本当はPCゲーだがね）で。フリーター。よくわからんことが続いてこう見えて結構混乱してるんで説明があつたら教えてほしいかな。ああ安心してくれ。俺はお姉さま萌だ。幼女は守備範囲外だ」

最後にちよつとした冗談を（ではないが）挟んだのは少し余裕が欲しかったからだ。まあこんな幼女には意味も解らんだろう

「軽くセクハラですよ、それ……。」

意味通じちゃったよチクシヨ

「まあいいです。私は……まあ神でも天使でもいいんですが”人の生死”を司る神様とでも思ってください」

すんげーテンプレ乙と思った俺は悪くないだろう

「へー天使様神様ねー。ねえねえ天使様あ。俺は何かミスで死んでチートとか強化してもらって違う世界にレッツGO!! 的なアレですか？」

「アレ、とはよくわからないのですがまあ有体に言えばそんな感じかと。ミスとはちがうんですけどね」

結構テンプレジャマイカ

〈閑話休題〉

とりあえず説明は終わった

まず俺はこの幼女天使にもわからん”イレギュラー”な出来事で死んで今に至るそうだ

んでここに来る前の出来事の件は管轄外なので知らんそうだ。まあこの幼女天使は生死を司る天使様なので誕生と終焉しかわからんそうだ。しかも人限定で

そんでもって俺はテンプレ道理何か貰えるらしい。なんだろねー

「さて何が欲しいですか？」

あ、ちなみに生死を司る天使様とか言ったくせになぜこんなことができるかと言うと”空想具現化”は神様天使様の必須項目だそうだ。てか神や天使に試験とか免許・・・はしらんがそんなものがあるんだね

「んっ・・・何が良いかなあ」

SSとか2次作品を見るときはポンポンと出るんだがいざ自分のこととなるとなあ・・・

「あ、一つ調べて貰うのってできる？勿論それが願い事ってわけじゃあんだけど」

「いいですよ。何が知りたいのですか？」

「俺のスペック・・・はいいか。えーっとじゃあ結構面倒なんだけど俺の身体や思考で一番合う武具って何かわかる？」

なぜに戦うことが前提かって？いいじゃん。このようなテンプレは転生憑依は戦うことが多いと相場が決まっているだろう

「そうですねー。アナタは・・・ヨーヨー・・・は武具じゃないか・・・」

おいこら今なんつった。ヨーヨーとか言ったよな？俺の人生でヨーヨーが深く関わったことすらねえよ。てかせめてそこはちくわとかにしとけと。ネタ的な意味で

「あ、鉄甲手脚てつこうしゅくなんて物がいいんじゃないですけねー」

「てっこうしゅきゃく？」

何それ？

「これですねー、えい！」

「おわっ!？」

天使様が俺に魔法をかけるように指で指すと俺の腕と脚に光の粒子？が纏わり出た

「そんな感じのが鉄甲手脚ですねー」

「ですねーって・・・」

光の粒子が消えたと思ったら俺の腕と足にゴツくてすごく硬い鉄の塊が装備されていた

すごく・・・大きいです・・・

「えーっと・・・名前は・・・無明天地^{むみょうてんち}。そのフルメタルガントレットとレギンスは何の付与、属性も無くただ愚直に硬くてトゲトゲしてる感じなやつですねー」

ただ空想具現でだされるものは一定以下のものを具現させると指定より強化される仕組みらしくこれはほぼ”不壊^{ふかい}”の付与がかかっている状態らしい。あ、不壊てのは読んで文字のごとし壊れないという概念付与物らしい。・・・すごく厨二です

「無明天地、ねえ・・・このだれが考えて作ったかしらんがそいつもまた厨二な頭してることもやらのって・・・」

と言いつつも気に入ってる俺。現金なやつだと？ハハ、そこは順応性が高いと言ってくれよジョニー

「ふーん……」

無明天地を隈なく見ているが、しかしこれは禍々しいな！。装飾も刺青みたいな象形文字（神様語？）が彫られてるし、何と言っても指先。鋭すぎるだろ。こんなもんいつか使用者に刺さるだろう常考

どれレギンスはつと……おう……コヤツも中々の禍々しさを放っておるわ！ガントレットは一見ブーツを鉄に置き換えたような形をしているがコヤツも象形文字による禍々（マガマガ）属性が付与されていた

ガントレットは肘先まで覆い被さるほどの大きさ。ガントレットは膝までの大きさ。まあ動きに支障がないのは”俺に合う”装備だからだろう

「んじゃこれと……あ、そうだ何個までいいの？」

「さあ？」

「さあつて……結構いい加減だな」

「自分で調べたらどうですか？」

いや無理だろ

てか……え、なんでこんな不機嫌なわけ。俺なんかした？……

記憶にござらん

「どうせ私は厨二ですよ・・・でも絶対この人には言われたくない・・・・」

おう独り言聞こえちまったい。そうか、俺の発言のせいなのね。ここはフォローをせねば・・・!

「お、おう!なんてコッタイ!こいつぁーすんばらしいモノをもらっちゃったお!感謝感激だお!ヒヤッフウウウ!!」

こゝ、これでどうだ!?

「・・・」

だゝ、だめか・・・!?

「えへへー。そんなによかったですかー」

「お、おうよ!こいつぁー俺の家宝だお!」

「えへへーそうですかー」

ミッションコンプライイット!

〈閑話休題〉

「んじゃ二個めいいかな？」

「いいですよー」

先ほどのベタホメ作戦【オペレーションさんしやう讃頌】による突貫攻撃により終始ニコニコな幼女天使を尻目に新たな”貰い物”を考え始める
そしてそんな笑顔のふつくしいアナタには10円をあげますん

「んじゃ”全技能の習得の可能性”っていうまた面倒なモノ貰えます？」

「いいですよー、えい！」

さっきと同じように指を指すんだが、それ必要か？まあ可愛いからいいけどさ

「一応聞かないとアレなんでなぜそのようなものを？」

アレとはアレですね読者のうわなにするやめ」

「うん、まあ”可能性”じゃなくて”習得”でもよかったんだけど”経験”てのが無いじゃん。”技”に振り回されていたら元もこうもないじゃん？」

それになんか遠慮しちゃったてのもあるんだよね。ほら俺日本人だし

「なるほどー、ちゃんと考えているんですねー」

そりゃね。それにそういった特訓とか練習とか熱い展開も楽しみにしてるわけだし

「ではほかにありますかー？」

「ほかには・・・もういいかな」

ぶっちゃけ少ないとも思うがまあこれだけあればいいだろ。どんな世界に飛ばされるかわかんないけど”全技能習得の可能性”さえあればなんにでも応用効くだろうし

「あ。そうそう。俺って転生なの？憑依なの？」

それ聞いて無かったわ。タケちゃんウツカリン又

「元々生まれる予定の子に憑依って形になりますねー。ちなみにサービスで記憶は10才の時に戻してあげますのでー」

おお。それは嬉しい。もし他文化や外国だったりしたら覚えるのも大変だし

「それと親御さんは武術と学問に秀でている方らしいですよー」

「へー。・・・つてらしいとは？」

「さっきも言った通り元々生まれる子に憑依させるので親はその時お腹の中に赤ちゃんが居る方しか選べないのですよー」

なるほどねえ。”親は選べない”なんて妙なリアルな話だぜえ・・・

「さて質問は以上ですかー？」

「そう、かな。・・・うん多分大丈夫かな」

「ではではーえい！」

鉄甲手脚を貰ったように光の粒子が纏わり出てきた。今度は腕や脚でだけでなく全身にだ

「年代は約1800年前、場所は中国の北東部。ではお元気でー」

そして今日二度目の暗転で幕を閉じる

終わりと始まり（後書き）

どうだっででしょうか？

自分としては前作に比べて結構読みやすくなったと思うのですが・

・・。

解り難いや意味不な所やご意見がありましたらご感想の方をよろしくお願いします。

補足説明：お腹の中に居る赤ちゃんに憑依して生まれるので、自分は転生もあながち間違いではないと考えています。つまり”憑依転生”です。厨二です。マシウマです。

憑依と家族

さて、俺が憑依して早10年が経った。今の今まで何も覚えていなかったというのは結構気味の悪いモノだ

そしてこの十年間特に変わったこともなくふつつーのガキンちょ生活をしていたわけだが。

「まさか本当にこんな世界があるとはな・・・」

そう呟いていた俺は家の庭にある井戸へと水瓶を片手に足を運んでいる。俺ん家は村の中央に位置する所にあり、かなりの裕福な家庭だ。周りの家と比べ些か・・・いや、かなり豪華である。なんでもこの村の創設に関わったとか何とか

まあ楽できそうでいいんだけどね、そのへんは。

父はどこぞの元お偉いさんらしく知恵もあり学問や兵法などはこの親父に教えてもらっていたりする。時代が時代なのでこういった家庭では兵法は覚えておいて損は無いのこと。

母はその上司だったらしいが何をしていたのかはあまり詳しくは教えてくれなかった。昔酔っ払っていた母に聞いてみたら母は力仕事担当だったらしい。

今の話でなんとなくお気づきだろうがこの世界は女性優待社会だ。力も権力も女性の方が強い。男尊女卑の名残のある社会を生前聞いたか見えていた俺だが、女性優待なのは普通に考えてみればそれが当

り前なのではないかと思う。

女性は科学では作れないであろう”子供を作る”という行為を簡単にやってのける。その時点で男と女の差は歴然であろう。男はただ”情報”を女に与え、女はそれを構築し形とする。そのうち人間は進化すれば男の要らない社会ができちゃいそうで怖い

少し話が脱線してしまったか。話を戻そう

まあ何故俺が井戸に足を運んでいるかと言うとそれが俺の仕事だからだと言えない。それ以上深い意味も無くただそれだけのこと

この水瓶だけで数十キロはありそうな瓶を軽々と腕一本で持ち上げている俺も中々の力持ちであろう。まあ鍛えた記憶が全くないからこれが世界の基準なのかはたまた天使様の恩恵なのかも知れんが

やっと井戸前まで着いた俺は瓶を降ろし、せっせと水を桶で入れていく。満タンになった所で桶を戻し両手でしっかりと持ち上げ、帰路に着く。これが結構難しいのなんのって。重さ自体は軽い方なのだが、水の量がハンパなく多い。そのため少し揺らすだけで中の水がユラユラと揺れさすがにバランスを崩しそうになる。

だがこれももう馴れたもんだ。最初の頃に比べればね。最初はバシヤバシヤと溢しながら歩いていた俺だが今の俺は水一滴たりとも溢さずに行ける。なんならステップ踏んでやろうか？

「・・・っ」

さすがにステップは無理だったよちくせう。まあこの水瓶は俺の身

長くらいあるしね。無理はいかんよ。ちなみに俺の身長は130？
くらいだともう。測れないから正確じゃあないけど

そんなこんなしていると今で言うキッチンの裏戸の前に着き、慎重に
瓶を片手で持ち、戸を開ける

「ふう、母さん。ここに置いとけばいい？」

釜戸の横に瓶を置き今日の晩御飯の支度をしている母さんに問う

「ええ。御苦労さま」

作業を辞めずに問いを返す我が母。その何気ないスマイル御馳走様
です

「ああそうそう、猛。お父さんが呼んでいたわよ」

「親父が？」

「居間か工房にいるかもしれないから行っておいで」

「うー」

親父がねえ・・・何かしたかな、俺

「親父ー、居るかー？」

俺は工房の暖簾のれんを潜り父を探す。何故庭の隅に位置する所に工房なんかあるかと言うと父の趣味だ。父は前の仕事では”書類整理”等が主な仕事だったらしいが手先が器用でガラクタ（本人曰く宝）をいじって物を作るのが得意だったそうだ

「おう、猛か。ちょうどいい所に来たな」

「ちょうどいい？・・・ああ、あの事ね。すまん親父。親父の干し肉ジャーキーを食ったの、猫じゃ無く俺なんだ。本当にすまんかった」

問いただされる前に言っとけば許されるって誰かが言ってたような気もしない

「は？・・・て、やっぱりお前だったのかよ！」

「え、何その反応・・・あ、俺ドジった・・・？」

この反応はそれでは無かったらしい。いかん墓穴を掘った。

「まあそれはおいおい問いだすとして・・・」

「できれば忘れてくれると嬉しいなんて口にだせません」

「もう口に出てるぞ」

「親父、本題本題」

「つく、おのれ・・・」

ふっ、せめてもの意趣返し(？)よ

「んじゃ本題な。ほれ」

「うわ、っと」

親父の手から何か重いモノが放りだされた。俺は少しバランスを崩すも難なくキャッチ。・・・すごく重いです

「誕生日おめでとう、といった方がいいのか？」

「いや知らんよ」

・ 第一俺の誕生日は今日でも今月でもねえし・・・。ん？これって・・・

「そいつの名は無明天地。お前が十五、六になったら渡そうと思っ

「てもんだ」

「無明天地・・・」

ああ、そうそう。今の今まで触れなかったが天使様からもらった無明天地が無いと思ったらこういう設定ね。なるへそ

まあ赤ちゃんの時に貰っても嬉しくも無いから助かった

てかまて・・・

「何故に今渡す？」

「いや何となく？」

何となくじゃあしょうがないか

「はぁぁぁ・・・ふうー・・・」

肉体の中にある老廃物をすべて吐き出す気持ちで息を吐く。別段そんなことはありえんのだがようわ気持ちの問題だ、気持ちの

「さて続いてスクワット3万回！」

は、無理なので300回で行こう

「12345678・・・・・・300うう！！！」

どうだ。あれから5年経って編み出した豪速スクワットウ→だ！ただし使用に伴い辺りが土埃が舞うのでご注意を

そう、もうアレから5年が経っている。この5年間は”無明天地”の為、猛特訓をしていたのだ。今までの身体では大きさ的にも感覚的にも不十分だったのだ。その為の猛特訓だ。

たく十才までの俺よ。ちったあ鍛えとけよ。十分力持ちだったけどさ

「さて・・・次は・・・」

次は何をしようか迷っていると家の方から来客を知らせる鈴が鳴った。余談だがこれは親父作の鈴だ。音はどっちかと言うと風鈴に似

ている

「はいはい、今行きますよつと」

俺はそそくさと庭から裏戸に入り、手拭で身体の汗を拭きとる

十分とは言えんがまあそこは仕方ないと割り切る

「はいはい、どちらさんで？」

扉を開けるとそこには立派な白髭をなびよせる老軀のお爺さんが立っていた

「あ、村長。どつたの？」

「フオツフオツフォ。ちょいと近くを通つたので。お前さんの様子を見ようかとの」

このどこぞのカニ星人みたいな笑い方するのはこの村の村長である。俺が産まれるよりもずっと前からこの家の者はこの村長にお世話になっている。てかこの村出身の者は皆例外無く村長に何かしろ世話になっている。

なのでこの村長を後ろ指を指すような奴は居ない。いたらそいつらは村八分にされる、多分。見たこと無いがな、そんなやつ。まあこの村長は皆の祖父に当たる存在だ。

かく言う俺もこの村長に面倒を見てもらった一人である。ちなみにこの村長が作る煮物が俺の好物の一つだったりする

「そつかそつか。なら上がったてよ」

「うむ、そうしようかの」

俺は村長を招き入れ居間へと案内する

俺は後で飲もう準備していたハーブ茶を用意し、居間に戻る。ちなみにこのハーブ茶もどき。家の庭に自生していたものだ。

飲んでみたらハーブぽかったので、気に入ったのもあり、今現在も庭の隅で育てている。

「砂糖は入れる？」

「では少し」

「ん」

サラサラっと砂糖を入れる

この砂糖は親父がどっかの土産でサトウキビを持ってきたものだ。それを煮詰め、ろ過させたものなのだが、さすがに精錬は無理なので黒砂糖だ。この時代の砂糖は貴重なので中々使えないよう封印していたのだが来客が、それも日ごろお世話になっている村長が来たのだ。

そんな封印も解禁だ。ありがてえありがてえ

「そう言えば猛よ」

「んー？」

茶を啜りつつまったーりとした時間が流れる心地よい沈黙の中、村長が口を開いた

「最近、この近くの森で熊がでるそうでの」

「へー、そりゃ怖いね」

「”普通の熊”なら殴り倒すお前さんが何を言う・・・」

そうなのだ。この身体になってから熊が恐怖の対象外となってしまう。森で果実を拾いに行き、クマと遭遇。ラッキー熊肉ゲットだZE みたいな思考になっていたりとする

「そんでの。ただの熊ならこの村の者でも大したことないと思うのであるうがの」

「・・・ただの熊じゃないって落ちね」

「そうじゃ。何でも最近熊の数が滅法減っておっての。どうやらその熊達を束ねており森の主である”人食い熊”の怒りに触れたようでお。最近まで山の奥で大人しくしておったのじゃが、人里の周りに出没するようになったのじゃよ」

「へ、へー」

やべえ。普通に心当たりあるんだが・・・

何故か知らんがここ周辺の森に俺が入ると動物達に襲われるという変なスキルを俺は持っているらしい。まあ獰猛とか危険そうな奴だけ限定なのだが

んで俺は森にはしょっちゅう行く。熊さんが森の中からこんにちわ。熊さんが連れたクマー

「じゃから猛も気をつけ」

「よし。俺が何とかしよう」

村長が何か言いかけたが勘づかれる前に俺が動かねば

「んじゃさっそく行ってくるわ！村長はゆっくりしていてね！」

「フオ！？」

そうと決まれば話は早い。すぐにでもいくぜ！てかこの場から離れろと俺の中の誰かさんが言っているような気がしなくもない

呆氣にとられている村長を残し俺は風のように颯爽と家から飛び出して行った

「・・・主と言っても一頭だけではないということを言い忘れておったわ」

村長は頭を抱え、自分の迂闊さに後悔する。が、長年生きて数々の修羅場を潜りぬけてきた人だ。すぐに何をすべきかを整理する。

「非常招集じゃー!!」

憑依と家族（後書き）

何とか2日連続投稿できた・・・

一応先代PCを使っておりますがコイツもいつまでもつやら・・・

熊と人

「いやぁ失敗した。マジで失敗した」

家を飛び出し森へと足を走らせて数十分。あることに気づいてしまった

「装備無しじゃん、俺」

そう。急ぐあまり何も持ってきてないのだ。しいて言うなら布の服と皮の靴を装備中だがね

そんな俺は戻るのが面倒と森に入って行って数分間、とくに異変も無く鳥のさえずりや小動物たちの物音が鳴り、大自然に囲まれているのだと実感させられる。こういった所に現代に無い安らぎがあるのだろう

マイナスイオンの応酬ってか。出てるのか知らんが

特にこちらから探すような真似はしない。だがあの場から逃げ出す為に建前とは言え「どうにかする」と言ったのだ。このまま手ぶらで帰るのも心もとない

だがまあそんな杞憂はどこぞに吹き飛んでいった。

「・・・ん」

ダラダラと歩いてた足を停止させる

そして数秒の静寂が辺りを支配する

動物や人間などはモノに意識を向けると、”電波”のようなものを飛ばすという。それに敏感なのが小動物等だ。有名な話では将棋や何かに集中している人の近くに小鳥は無警戒に近づいたりするそうだ。それに気付いた人間はその小鳥を見ようと意識を傾けると小鳥は瞬く間に去ってしまう。

そしてもう一つ。獲物を狩る時にも”電波”じみたモノも飛ばす。それが殺意、殺気だ

何故このような話を言いだしたかと言うと・・・

「ガルウアアアア！！！」

現在俺は動物特有の殺気に気付いたと思ったたら囲まれておりました
とさ

「ホオオアッタア！」

そんな俺はある程度殺気と気配だけで位置を把握していたので真っ
先に飛び出し襲いかかってきた熊を下顎を砕かんとする拳でご挨拶

グシャリと何かが折れ、ザラつく様な音が鳴ると熊は大人しくなりそのまま倒れ伏した

当然ながら熊、しいては人間ですらこの程度では死なない。まあ本当に当たり所とか不幸が重なれば死ぬだろうが、今回は違うだろう。詳しくは知らんがあまりの痛さに気絶とかそんなところだろう。まあ調べたりしたわけだから知らんし知りたいとも思わないがね

「まあ一頭だけ、ていう落ちなわけ無いよねー」

さっきも言った通り俺は囲まれておるのだ。当然仲間の仇打ちに熊は憤慨する勢いで襲ってくるだろう。逃げると言う選択肢を捨ててね

「ではこれより【オペレーションじゅんらい迅雷】を開始する」

そんな厨二全開である俺は最強なのである

—— 第三話【熊と人】 ——

「うおおお！！ニュートン涙目！スピニングバードキック！！」

自重を知らない厨二全開モード中の俺はどっかで見た（主にゲームやアニメ）技をてけとーに放って行った俺は最後の頭を倒すと小休止に木にもたれ、ズルズルと地面へと座り込んで行った

「ふうー・・・流石に疲れたわ」

ため息を吐きながら倒して行った熊達をひいふうみいと数えて行く。ひいふうみいの次は何だか知らないのでそこから四五よんごと数えたのは完璧にどうでもいい話だ

「わぁお。しめて十六頭。ナンテツコタイパンナコッタ」

さすがに幾度も襲われている俺でも一度にこんな数の獣共に襲われたことはない。あ、この熊共は皆戦闘不能にただけで殺したりはしていない。熊がキレてんのも多分俺が狩りすぎたせいもあるのだろう。さすがにこれ以上は自重した。てか狩ったら食わないとね。全ての生命に感謝を……ってやつ

「さてそろそろ戻るか……」

時間もそうだがこんだけ再起不能にやってんだ。俺の面目もたつし熊達も数カ月は大人しくなるだろう

「ふんふん、ふん、つと」

軽快に鼻歌交じりに帰路に着いた俺は先ほどの事を考えていた

動物に詳しいとは言えない俺だが少しひっかかることがあるのだ。その懸念されている事とは「熊は群れをなすのか。そしてあのような集団狩りをするのだろうか」である

よくテレビやアニメなどで熊に遭遇しちゃった的なモノは何度も見たことがある。だが大抵、いやほとんどが”一頭”が現れるというものだった

「ん？」

気のせいだろうか？すぐ真横の藪からカサカサと風とは違う、何かこう物体なようなものが通った音が鳴ったような気がしたのだ

「・・・気のせい？」

だと願いたい。かなりの数を相手してきて俺は肉体的にも精神的にも疲労困憊とは言わなくともかなり疲れているのだ

俺の杞憂か、と思い不意に止めてしまった歩みを再開させようとした瞬間。

「・・・っ!？」

ドシンドシンとその体躯が何百キロにも達するであろうことを証明した足音を響かせ、藪から堂々と這い出てきたのは

「グルルウ・・・!」

この森の主であろう”人食い熊”であった

「おいおい・・・そりやお前、反則だろ・・・」

獲物を捉えてか、それとも怒りのあまりなのだろうか。鋭い牙をチラつかせガチガチに閉じたその牙の隙間から粘性の強い涎よだれがドロつと地面に垂れ落ちる

流石にこれは啞然とする。何が反則かってそりやお前さん。どこの世界にワゴン車並みの熊が居ると思うのかね？そんな世界線、俺が無かったことにしてやるからちょっと教えに來い

「グガアアアア！！！！」

現実逃避をしている俺にこの熊はそんなことは知ったことかと言わんばかりに突進をしかけてきた

そんな熊に俺はすぐさま冷静さを取り戻し

「迎え打つ！」

狙うは熊の弱点である眉間。ご丁寧に奴さんから頭から突っ込んできてるのだ。それを狙うほかないだろう

なら俺は死の幕引きを持って終わらせてやろう、この毛むくじやらめが！

「ミズガルズヴォルスングサガああ！！！」

タイミングを合わせ、力に重点を置いた大ぶりの拳を眉間へと叩きこむ

パキッと綺麗に乾いた音が鳴った。それが熊の頭蓋骨へと損傷意味することを同時に理解する

「グオオオン！オオン！！！」

熊は眉間から血を流し悶え苦しむ

ちなみにさっきの台詞は厨二ウマーな人には必見の”怒りの日”というゲームの技だったりする

いやしかしこの熊、丈夫である

正直眉間を砕いてやった俺の拳も砕かれてんじゃねえだろうかと思ってしまうほど硬かった。てか痛い。現在進行形で痛い。やっぱ鉄甲だけでも着けてくればよかったとひどく反省

手をプラプラとさせていると悶えていた熊も体制を立て直し、血走った瞳で俺を睨んでいた。眉間から垂れる血と一向に収まる気配のない涎がドロドロと絶え間なく噴出されていて、微妙に怖い

「まだやのか？熊公めが」

軽く殺気を放出させてみる、が何分本気で殺そうとかそういった残酷めいたことは一度だって考えたことの無い身だ。本当に殺気が出ているのかも怪しい。狩りは・・・ほら。俺も必死だからさ

まあようは殺す気と書いて殺気なのだろ？多分そんなイメージでやればコロっとできたり

「（するわけがないよねー）」

確かめるも実践も糞も無い。何故なら何もかも投げ打って目の前の毛むくじやらの”戦士”は俺を襲いにかかってきたのだから。一撃耐えたとはいえ身体に大きな怪我を負ったその身体で

そんな俺は素直に感動した

なら俺は愚直に迎え撃つのが礼儀であろう。それがせめての戦士たるこの熊への礼儀だ

ただ猛進してくる熊へととどめの一撃をさす

パキヤアアつとスカツとしたどこか金属音にも似た音が鳴り響く

そして俺は真つ赤に染め上げた右拳を熊の頭から抜き、一礼

少し感傷に浸った俺は少しの間を開け熊をおんぶするかのように抱え、帰路に着くことにした

熊と人（後書き）

感想お待ちしております（
、 艸、
）

熊の力と人の力（前書き）

だめだあ・・・すんげえグダグダ感・・・

グダグダってレベルじゃねえぞ！？

熊の力と人の力

「よっ・・・ほっ、と」

人食い熊を倒した俺は村へと足をのばす。トレーニングの途中だったことに気付いた俺は娯楽半分鍛錬半分の気持ちで左右にステップしながら帰ることにした

てかこの熊。見た目通りすんげー重い。まあその方が都合がいいので別に構わんがね

「ブヒイイイ!!」

「うおっ!?!」

右にステップインした瞬間。横の藪から猪が飛び出してきた。少しビビったのは内緒だ

今の俺は熊をおんぶした格好であり、今ここで襲われるのは正直勘弁してほしい。が、猪程度なら足一本で捌けるので問題ない。本当に一本だけになったら問題有りまくりだがね。色んな意味で

「んにやるお!!」

タイミングを合わせ、ジャストの所で猪の頭部の骨を粉碎する気持ち（あくまで気持ち）で蹴り出す

「プギヤア!!?!」

頭の骨と牙をへし折りそのままゴロゴロと転がっていく

「はぁ・・・今日は猪鍋と熊鍋かねえ」

最近は肉ばっか食べていたのですんごく勘弁していただきたい。が、文句は言えない。こんな時代ならなおのこと

熊を担ぎ直し熊の上に猪を足で放る

ドサッと重量が増えたことを感じ、これ以上獲物を増やすわけにはいかないのでさっさと帰ろう。そう思った瞬間

「嘘・・・だろ・・・」

俺は今見た光景に驚きを隠せず、せっかく担ぎあげた熊と猪を落としてしまった

今思えば猪が俺を襲ってきたには少し様子がおかしかった。俺が猪を蹴り碎く瞬間に気付いたのだが、猪はかなりの距離を走ったかのように疲労困憊な状態だった。その時は興奮でもしていたのだろうと思ったのだがどうやらそれは違ったようだ

「これは反則すぎる・・・」

俺が見た光景とは

先ほど討ち取った、”人食い熊”の”群れ”であった

—— 第四話【動物の力と人間の力】 ——

「！！つとと」

一番近くに居た熊が大木をも破壊するであろう爪で俺を襲う。それをバックステップでかわす

様子見といったところだろうか。今の攻撃に倒そうと言う気概がなく、ただの様子見、そう例えるなら”猫が球を転がし遊ぶ”ような感じだった

有に及ばず、猫や熊にとつての”遊び”であつて、人間が喰らえば骨を、悪ければ死を与えるようなものである。

「これまた多いな・・・」

先ほど倒して行つた熊達よりも大きい熊が数十頭。かなりシユールの光景だが全然笑えない

大きさもありさつきとは比べ物ならない熊熊熊熊。ここまで俺はコイツらの怒りを買つてしまったのだろうか？俺としては自然の摂理として、弱肉強食の世界としてある程度納得して貰いたいものだ。
・俺も生活がかかつているのだから

別に食うだけが目的として狩つていったわけではない。肉は捌き保存の効くように加工しそれを冬に備える。それでも余るのなら売ったり分けたりする。皮は毛皮として。なのでありすぎて捨てるなどと言つ行為はいっさいした覚えはない。

だが言っているそばから理解した。これは人間の勝手な行動なのだと

これが逆ならどうだ？俺たち人間は「自然の摂理だから」「弱肉強食だから」と開き直るだろうか？皆、NOと答えるだろう。そうならないよう人は動物達に比べ非力な力を違ふ分野で生かし、今まで生きてきた。

そう考えると熊達のこの”報復”にも納得がいく

お前らが先にやったのだ。だから復讐する。死んでくれ。だがそう

言われても俺は全力でお断りの意を表明してやる。だから言ってやる

「熊共よ。俺はお前らなんかに殺されてやるほど、マゾ思考は持ち合わせていないんでね」

まあそんなことこの熊達が考えているかは知りもしないし知りたくもない

これは狩りでは無い

熊達は復讐のため、仲間の仇打ちのため。はたまた腹が減った為の行動であろう

なら俺は何の為にここで相對している

それは生きる為だ。生きる為にコイツらを”駆逐”する。俺に”逃げ”の選択肢はない

何故なら俺は生前と同じく馬鹿にされるのが嫌いだ。

ここまで言っというてなんだが今までの考えは俺の考えすぎなのかもしれない。だがそれでも構わない。

俺は先ほと言った通り馬鹿にされるのが嫌いだ。どんな野郎だろうが俺を馬鹿にした奴は問答無しに・・・まあ色々してやってきた。もちろん冗談等は許容範囲以内だが

だから本気で俺を馬鹿にするのは絶対に許せないし許さない。

つまりこういうことだ

俺を殺すという事は俺を殺せる、”見下している”と言つことなのだ――

「自分勝手か？ああ自分勝手だろうな。何故なら俺は自分勝手だからな」

意味がわからん？知るか。言ってる俺もわからん

「んじゃま。さつさと終わらせてやるぜ。熊共」

そう言い放ち俺は地面を踏み砕き、疾風の如く飛び出して行った

「長。^{おさ} どうなされた。急に招集をかけるとは」

村長に対し発言をするこの男はこの村の代表格の一人である。過去に賞金が懸けられたこともあり、若いころはやんちゃが絶えなかつたと公言している。その賞金もその”やんちゃ”のせいで貴族に恨みを買われ免罪をかけられ、賞金首になってしまったという。

その賞金首のレッテルも免罪をかけた貴族の不正行為を暴き不問となった、とも言っていた。事実だか定かではない

「うむ。それは少しまつてくれ。これ、太史の者はおらんかの」

村長は男に手で制し、集まった村の衆に問う

「はいはい、すいません。ちょっと通りますよー」

すぐに奥から手でかき分けて一人の男が現れた

「どうも、長。私に何か？」

頭をポリポリとかきながら村長に問うのは”猛”の父親である、太^た史^{いしせん}仙であつた

「仙か。いやのお、用とは他でもないんじゃが・・・」

村長は太史仙の顔を見るやいなや気まずそうに目を細め白髭を手で弄ぶ

「はぁ・・・」

太史仙は何のことか見当もつかず村長が言ってくれるのただ待つのみ

「・・・実はこの」

少しの沈黙の後、村長は決意したように口を開いた

「お前さんの息子がの・・・」

やはり言いづらいのか、村長は渋い顔をしながらもポツリポツリと話しだす

「猛が何か？・・・まさか何か御迷惑を・・・？」

太史仙も違う方に思惑を進め、一人冷や汗をかく。目の前にいる村長もまた違う冷や汗をかいているとも知らずに

「いやそれは違うんじゃない」

それをすぐに違うと否定する

「では何を・・・？」

太史仙はまったく思いつかないといった素振りで聞いた

「最近、この近郊に熊が、それも大量に出没してる件は知っておるな」

「ええ。自分も何度か見ました」

「その件を猛に話したんじゃよ。今日、お前さんたちが留守の間に、
のお」

「・・・あー、なるほど」

太史仙は何かを理解しなるほどなるほどと一人悟る

「おい、仙。一人でわかってないで俺たちにも説明してくれ。俺たちとしてはその話と俺たちが集まった理由がわからんだ」

そう言うのは先ほど村長に聞いた元賞金首の男。この男はあまり猛とは交流もあらず、そして特別知性に秀でているわけでもなく、今の会話だけではまったく解らないのだった

「いやねえ、予想ですがね。うちの息子が一人、その森に突っ込んだようなんですよ」

そう言っ指を指すのは、幸か不幸か、はたまた運命のいたずらか。ここ最近、一番に野獣の目撃数が多い森であった

「でしょう？長」

「うむ・・・」

自分の不甲斐なさに後悔しつつもその現実肯定する

「うむって・・・。そんな悠長なこと言ってる場合では無いでしょう！？至急、搜索隊と討伐隊を発足しなくては・・・！」

辺りがざわめいた所で一人の男がまったをかけた

「まあ猛なら大丈夫なんじゃないかな？ねえ、長。だから貴方はこのように悠長していられる暇があったわけでしょう？ああ、父親の自分から言うのも変ですが別に長を攻めているわけではないのであしからず」

そう余裕のある発言をしたのは猛の親である太史仙であった

「な！？おい仙！親のお前がそれでどうする！？いくら武に秀でてもいようがまだ子供なのだぞ！」

それに激情したのはまたもや先ほどの男。この男は自分の行ってきた”やんちゃ”を反省し、正義感のある大人へと成長させたのであった。だから猛の親であるにもかかわらずこの発言に対して激情を隠せなかったのである

「まあまあ。落ちつきましようって」

「落ちついていられるか！第一いくら武器を持っていたても」

「猛は素手で行きおったぞ」

ここで村長が火に油を注ぐ

「子供の力じゃ・・・ってす、素手え！？」

男は激情のあまり反応が一つでかくなっていく

「長。話がややこしくなるので少し」

そんな村長に少し目で睨むと縮こまるようにして俯いた。少し無礼な気もするがそこは時間の都合解ってほしいといったとるだろうか

「う、うむすまんかった」

そんな太史仙の行動にも咎めるようなことはせずただ自分の愚行に對して思いつめる

自分でも何故火に油を注ぐような真似をしたのかは理解できなかった村長であつた

「まあ大方、長自分の招いた行動を皆に知ってほしかったから招集をかけたのでしょう。自分の愚行を隠さず皆に知ってもらつために」

「・・・」

村長に目を配ると先ほどと変わらず俯いたまま

「それに猛はとても強い子です。心配はいりませんよ。極端の話、何があつても困るのは自分の家だけです。で重ねて言うようですが心配ならず。というか・・・」

少し言いづらそうに目線を彼方に向け、一滴の汗を垂らす

「ここの辺りで、”獣が激減してしまつたら”と考えた方がよいかと・・・」

「フウハツハツハツハ！―当たらんぞ、熊野郎！」

全てを粉碎するかのような鋭く破壊力のある爪、全てを噛み砕くかのような獐猛な牙。それら全てが四方八方襲ってくる

それら全てをかわしつくす。というかこんなの非武装状態である今の俺が喰らえば良くて骨折。悪くて四肢が持って逝かれる

え？普通悪くて”死”じゃないかって？たわけが。俺がこのような奴に殺されるとでも思ったか

「ふん！」

またもう一頭の頭蓋骨を割る・・・んだが、これがまた硬い。本当に硬い。現状、何十頭の中で今ので六頭目になるんだが、普通の熊なら一発もしくは二発で砕くことができるんだが、この”人食い熊”は違う

さすが森の主と言われることはあるな、としみじみと思った。やは

り他の熊共なんかより断然に強い。そして硬い・・・これマジカンベンしてほしい

そろそろ俺の拳のライフが0になりそうなんよ・・・

「なら足で砕けばいいじゃない!!」

真横から襲ってきた爪をかわしカウンターぎみにハイキックを打つ

うお・・・目が飛び出た・・・。本気で焦った

その焦りのせいか、一瞬。たかが一瞬。されど一瞬、気が緩み周りを見ることに疎かになってしまった。

「・・・!」

気づいた時にはもう熊の爪は腹の真横まで迫ってきており、このままでは直撃

なら俺の選択肢は

「耐えブウフ!」

耐えると言いたかったがとつさに腕を盾のように構えガードしたことにより致命傷には至らなかった

「・・・つぬう」

今の攻撃で数メートル飛ばされたが、転がりながらも体制を立て直し、四つん這いの形で静止する

左腕を見やる。少し出血しているがまだ使える。ならすぐに反撃を
と型も走法も糞もない半ばやけくそのクラウチングスタートで猛進
する

「戦況は不利。されど意気軒昂いきげんこう!!」

咄嗟の猛進が功を期したか、いきなりの反撃に熊達にも、一瞬の動
揺を与えた。

そこですかさずドロップキックを打つ

「なるおおお!!」

速度をつけたドロップキックは熊をお返しにと数メートル吹き飛ば
し返した。何体かを巻き込みながら転がっていったのはご愛嬌。可
愛くもねえが

このまま落ちれば無様に倒れた体制になるが、そんな阿呆なこと
になるとわかつているなら俺はやらん。まあ半ば・・・半分以上ノリ
でやったのは認めるが

手を地面に付け、そのまま竹とんぼのようにクルクルと回る。さす
がにこんな体制で巨体であり頑強な熊にダメージを与えられるとは思
えない。そこで俺は足をピンっと天を向かせ、反動生かし後方へ
と飛ぶ

「ハア・・・ハア・・・」

この身体になって力だけでなく、先ほどのように苦も無く動いた身

体には最初ビックリした。だが強くはなっても疲れは出る。

現在の俺は連戦もあり、疲労値MAX付近なのだ

ここに鉄甲手脚、”無明天地”があれば話は変わるのだが・・・

「ふう・・・どうつまかなあ・・・」

膝を付き、熊共の行動を見逃さずリークし警戒する。そしてこのままでは敗北、つまりは死を意味することを視野に入れ模索する。ああ、さっきも言ったが俺に逃げの選択は無い

「戦なら大将首打ち取れば勝ちなんだがなあ・・・」

と、無意識に出たこの言葉にひっかった。

軍とは兵士がいて頭である大将が居て、軍として組織する。ならこの異常な群れを作っているこの熊共にも言えることではないか、と俺は考察した

熊達も俺を警戒しているのか俺の周りをウロチョロと動くだけで襲ってくる気配は無い。ならばこれを期にとボス熊を探すことにした

「・・・んな都合よく・・・ん？」

これが都合よく見つかったのだ。確証は無いが一頭だけこの群れの一番奥にチラチラと木陰から頭だけを出している熊が居るのだ

「・・・そおれ」

その辺で拾った拳大の石を拾い上げ、その熊目がけ投擲する

ギヤウンと短い悲鳴とともに頭が吹き飛んだ熊が木陰から這い出てきた

そして熊達はそれを見るや否や蜘蛛の子を散らすように周りの森へと姿を消していった

「・・・これはいい武器を見つけた」

そして天使様がなぜ俺にヨーヨーが合うなどと言ったのか少しわかったような気がした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9713y/>

真・恋姫†転生 ～太史慈伝～

2011年12月7日11時00分発行